
赤と青の神話 一章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 一章

【Nコード】

N7556X

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

地上に生まれ変わった水の女神は、化け物の姿で、深い森の中に住んでいた。

近隣を治める王は、彼女を討伐しようとは何人もの兵を森へ送ったが、誰も彼女を倒せるものはいなかった。

そんなとき、三人の若者が現れ、化け物を退治しようと名乗りを上げる。

王は喜び、見事化け物を倒したものには、自分の娘である姫と結婚させようと言った。

「赤と青の神話 序章」の続きです。
長くなりそうなので、一章ごとに区切っています。
よろしく願います。

森の化け物 1

一章 森の化け物

彼女は世界にあるすべてのものが憎く、地上に生きるすべての生き物が恨めしかった。

木々の間から差し込む木漏れ日も、湖面を吹き渡る風も、岸边に打ち寄せるさざ波さえも、何もかもが嫌で仕方がなかった。

彼女は特に森に住む生き物やそのそばに住む人間が嫌いだった。

空高くさえずる小鳥も、木のうろに住む子鹿も、湖でゆったりと泳ぐ魚も、畑を耕す村の親子も、彼女にとっては目障りで仕方なかった。

暗く冷たく静かな世界。

彼女はそんな世界を望んでいた。

彼女のそんな思いからだろうか。

いつしか彼女の住む森は木々が高く生い茂り、小川の水は濁り、臭気を放つようになった。

近隣の村々の井戸は枯れ、土はぬかるみ、畑の作物は育たなくなつた。

村人達は住み慣れた村を捨て、移住せざるをえなくなつた。

人の住まなくなつた村々は、木々に飲み込まれ、暗い森の一部となつていった。

その地方を治める南の王は、作物が出来なくなつた原因を突き止めようと、幾人もの人々を森に遣わした。

しかし、誰一人として戻ってきた者はいなかった。

そのうちに、その森には恐ろしい化け物が住むという噂がどこからかさやかれ始めた。

困り果てた王は、土地が腐る原因を突き止め、見事化け物を退治してきた者には、莫大な財宝と自分の娘であるフィエルナ姫を与えようとお触れを出した。

腕に覚えのある者達が集まり、暗い森に次々と挑んでいったが、無事に戻ってくる者はいなかった。

ある者は腕を、ある者は足を失い、息も絶え絶えに戻ってきた。戻ってきた者達は、口をそろえて森に住む化け物のことを語った。人々はますます恐れて、一年もすると森へ行こうという者は誰もいなくなった。

ある日、王の元に三人の若者がやってきた。

森の化け物を退治しようという若者三人に、王は喜び祝宴を開いてもてなした。

祝宴には数頭の子牛の丸焼きや森の果実、川魚などの料理が並べられ、広間は数百本のロウソクの灯りで真昼のように照らし出された。

森の化け物 2

王は酒の入った杯を片手に、ほろ酔い加減にフィエルナ姫に声をかけた。

「お前の花婿が、この三人の中から見つかるかもしれないぞ。森の化け物を倒すほどの勇気あるものが、次の王になるのだからな」

王はそういつて豪快に笑う。

フィエルナ姫は広間を見渡し、そばにいた若者に近づいていった。一人目の若者は、ヒーネと言う貴族だった。

彼はうやうやしくひざまずき、フィエルナ姫の手に口づけする。

「お可哀想な姫、すぐにわたしが化け物を退治して、お父上の悩みを解決して差し上げましょう。そしてその暁には、ぜひわたしの妻になってください」

フィエルナ姫はお辞儀をして、おしゃべりをしている人々をすり抜けて行く。

広間の隅のテーブルの前で酒を飲んでいた若者に声をかけた。

二人目の若者は、ケーデインと言う傭兵だった。

彼は大きな体で見下ろすように、無愛想に頭を下げる。

「森に住む化け物を退治すれば、莫大な金貨が手に入るというのは本当かい、姫さん。本当にそうかどうか、領主に念を押しておいてくれないか？」

フィエルナ姫はケーデインに、父は約束を破らないと言って、広間を見渡した。

広間のどこを探しても三人目の若者が見当たらない。

フィエルナ姫は近くの人々に、三人目の若者の居場所を尋ねた。

ある者が、広間を出て行くのを見た、と言い、フィエルナ姫は若者を探しに出かけた。

広間を出ると、フィエルナ姫の耳に物悲しい豎琴の調べが聞こえてきた。

豎琴の音に導かれるように、廊下を曲がり、塔の階段を上へ上へと登っていく。

塔の最上階に一人の若者が月明かりに照らされて座っていた。

三人目の若者はクロフと言う吟遊詩人だった。

クロフはフィエルナ姫の姿に気付くと、豎琴の手を休め立ち上がる。

「ご機嫌麗しゅう、姫。この度はどのようなご用でここまでいらしたのでしょうか？」

フィエルナ姫はクロフの前まで歩いていくと、他の若者にしたのと同じ質問をした。

「あなたは どうして森の化け物を退治しようと思ったのです？ 命が惜しくは無いのですか？」

するとクロフは黙り込み、暗い空に目を向けた。

夜空には白い月がぽっかりと浮かんでいた。

「命が惜しくないと言ったら、嘘になりますね」

クロフは夜空から視線を戻し、月の光に照らされた赤金色の瞳でフィエルナ姫を見つめる。

「しかし、ぼくにはそれをやり遂げなくてはならない理由があります。太陽の女神様がそうするように神殿に啓示を下されたのです。そうしてぼくは地方を巡る神官、吟遊詩人として、動物や小鳥たちに導かれ、ここにやってきたのです」

森の化け物3

「まあ、それではあなたがここにいらしたのも、太陽の女神ラナン様のお導きだというのですか？」

フィエルナ姫は改めてクロフの顔を見つめた。

燃えるような赤い髪が印象的な、端正な顔立ちをした若者だった。「何という偶然でしょうか。わたくしも先日、女神様を夢で見ましたの。これからここにやってくる若者を手助けするようにと」

フィエルナ姫はクロフの手助けがしたいと思い、父親である王に出来る限りの援助をするように頼んだ。

王は若者達に馬や食料、化け物退治に必要と思われる武器や防具を授けた。

貴族のヒーネには、噴火口から引き上げた鉄で打った剣を。

傭兵のケーデインには、岩の中から掘り起こされた金属で鍛えた盾を。

吟遊詩人のクロフには、聖なる宿り木で編んだ靴を手渡された。

次の日の朝、三人は馬を駆り、早速森へ向けて出発した。

しかし森へ向かう途中、貴族のヒーネがフィエルナ姫を他の二人に取られたくないと思い、ある提案をした。

「このまま三人でそろって森の化け物を退治すれば、簡単に倒すことが出来るだろう。しかしそれでは姫も財宝も三人で分けないといけない。財宝はともかく、姫を三人と結婚させるわけにはいかないだろう？　そこでどうだろう。一番早く森に着き、化け物を倒した者が姫も財宝もすべて手に入れるというのは」

少しでも多くの財宝が欲しかったケーデインは賛成した。

内心では姫と結婚して、この南の国を治めるのも悪くないと考えていた。

それに対し、クロフは反対した。

化け物の正体がわからない以上、むやみに別々に行動するべきで

はないと考えたのだ。

しかし二人は聞く耳を持たなかった。

さつさと馬を走らせ、我先にと荒野を駆けていってしまった。

クロフは馬を走らせ二人の後を追ったが、森にたどり着く頃には二人を見失っていた。

クロフは馬の手綱を木に結びつけ、目の前に広がる広大な森を見上げた。

深い緑の森は丘の彼方まで広がっているかのように思えた。

するとどこからか赤い小鳥が飛んできて、クロフの肩に止まった。

「太陽の女神様の言伝です。ここにあなたの求めるものがあります。

さあ森にお入り下さい」

それだけ言うと、赤い小鳥はどこかに飛んでいってしまった。

クロフは辺りを見回し、一歩一歩慎重に森へと入っていった。

森は厚い木の葉に覆われ、ほとんど太陽の光が届かない暗闇だった。

森の化け物 4

地面の土はぬかるみ、沼地のようになっていた。

しかし王から授けられた聖なる宿り木で編んだ靴のおかげで、平地を歩くように苦もなく進めた。

しばらく行くと、馬のいななきや人の叫び声が聞こえた。

「助けてくれ！」

クロフは肩にかけていた竪琴を背負い直し、腰の短剣に手をかけ小走りに森の奥へと急いだ。

空の開けた場所に、馬の鼻面とヒーネの頭だけがのぞいている。

クロフはヒーネの側に走り寄ると、両手を泥の中に突っ込んだ。

「た、助けに来てくれたのか？」

ヒーネは涙ながらに訴える。

クロフは泥土を手でかき分け、泥の中に埋まったヒーネの体を引っ張り出そうとした。

しかし宿り木の靴では二人分の体重は支えきれず、少しずつ泥の中へ沈んでいってしまう。

クロフは泥の中から両手を引き抜き、木の上を見上げる。

近くの木に近づくと、その幹を登り始めた。

「おい、わたしを見捨てていくのか！」

ヒーネは頭だけを泥の上に出して叫んだ。

「何という薄情者だ！ 神に仕える吟遊詩人の名が聞いてあきれる！」

ヒーネはなおも叫び続けた。

声が枯れ始めた頃、不意に木の上から一本のつるが垂らされた。

直後、クロフが木の上から飛び降りてきた。

「このつるにつかまってください。つるを木の枝に引っかけて引っ張れば、あなたを泥の中から助けることができます」

クロフは泥の中に埋まったヒーネの体につるを巻き付け、木の枝

に引っかけ力の限り引っ張った。

ヒーネは泥の中から助け出され、クロフの両手を泥だらけの手でつかむ。

「ありがとう、君は命の恩人だ」

礼を述べると、ヒーネは森の奥を目指して歩き始めた。

「待ってください」

クロフは歩いていこうとするヒーネを呼び止める。

「あなたの馬がまだ泥の中です。手を貸してください」

ヒーネは振り返り、眉をひそめる。

「この先は馬では進めないだろう？ 放っておけばいい」

そう言っ、ヒーネはさっさと森の奥へ歩いていってしまった。
クロフは仕方なく一人で馬を泥の中から引き上げることにした。

森の化け物 5

馬の胴体につるを巻いて引つ張り上げた。

前足が出たところで、馬は自分から泥の中から這い出てきた。

馬は全身を振るって泥を落とし、クロフを長いまつ毛の下からのぞく黒い瞳でじっと見つめる。

「ありがとうございます。助かりました」

クロフは馬の首をなでながら微笑んだ。

「気にしないでください。当然のことをしたまでですから」

「それではわたしの気が収まりません。何かお礼をさせてください。そう言えば、わたしが泥に沈んでいくとき、一匹の狐が近くを通りかかりました。狐はわたし達を見て意地悪く笑いながらこんなことを言いました。『泥の沼地は木を持って通れ。木の葉の中は火を持って通れ。泉の水は剣持で通れ』と」

クロフは口の中でそれを繰り返しつつぶやいた。

「それはいったいどういう意味なのだろう？」

腕組みをし、首を傾げる。

「さあ、わたしには何のことかさっぱりわかりません」

クロフと馬はお互い首をひねっていたが、いつこうに何のことかわからなかった。

「狐の言うくらいだから、その言葉はきつと何か意味があるのだろう。でも森の奥には何があるかわからないから、君は森の外で待っていてください」

「しかし……」

馬はしばらくためらったように足元の土をひずめで掘っていたが、クロフが馬の首を軽く叩くと、大きくいなくて元来た道に戻っていった。

クロフは森の暗闇を見据え、一步一步確かめるように泥の道を歩いていく。

森の木々は鬱蒼と生い茂り、太陽の光が少しずつ薄らいでいく。ついに辺りは薄闇に覆われ、足下さえおぼつかなくなった。

そこで腰に下げた布袋の中から火打ち石と油を塗った松明を取りだした。

松明に火を灯し、クロフは暗くぬかるんだ道をゆっくりと進んでいく。

しばらく進むと、薄闇の奥から低いうなり声が響いてきた。

クロフは身構えて、油断無く辺りを見回した。

うなり声は木々の上からとぎれとぎれに聞こえてくる。

それが男の声であることにクロフは気づいた。

手に持っている松明をかざし、木々の枝に目をこらす。

闇の中に浮かび上がったのは、つるに絡め取られた人影だった。

クロフは松明を手に、そろそろと人影に近づいていった。

人影はクロフの姿に気が付くと、身じろぎして小さなうめき声を上げる。

森の化け物 6

それは森に来る途中で分かれたケーディンだった。ケーディンは首を動かすのが精一杯だった。

「すまないが、このつるを切ってもらえないか？ 礼なら後でいくらでもする。だから助けてくれ」

クロフはケーディンの求めにうなずいた。

しかしどうすればつるを切ることが出来るのかわからない。

ために短剣で斬りつけてみたが、太いつるにはわずかに傷が付いただけだった。

クロフは何か方法がないか、辺りを見回し考え込んだ。

少し離れた暗がりにはヒーネが頭までつるに覆われ、叫び声を上げている。

「早くつるを切ってくれ！ 礼なら後でいくらでもする！」

そこでふとクロフは疑問に思った。

他の二人がつるに絡め取られているのに、なぜ自分だけはそんなこともなくここまで来られたのだろう。

クロフは馬に教えてもらった狐の言葉を思い出した。

『木の葉の中は火を持て通れ』

クロフは松明に灯った炎を見上げる。

そして恐る恐る松明の灯火を木のつるに近づけた。

何も知らないケーディンは、財宝ほしさに自分がつること燃やされるのではないかと思ったようだ。

「おい、やめろ。財宝なら全部あんにくれてやってもいいから、命だけは勘弁してくれ」

ケーディンはつるに縛られた体を揺らし、もがいた。

「動かないでください。大丈夫、あなたに危害を加えるつもりはありません。少しの間じっとしていてください」

クロフはゆっくりとつるに松明の火を近づけていく。

するとそれまでケーディンの体を縛り上げていたつるが、すると解け始めた。

つるが急にほどけたので、ケーディンは支えを失い、宙に放り出される。

クロフが受け止める間もなく、ケーディンは木の枝をつかみ、両腕でぶらさがった。

「松明、か？」

ケーディンの言葉にクロフがうなづく。

「思った通りです。このつるは火を怖がり、松明を持った者には巻き付かないようです」

ケーディンは片手で枝にぶら下がり、すぐさま肩にかけた革袋を探った。

そこから松明の棒を取り出し、クロフの松明にかざし、火を灯した。

ケーディンは松明を持ったまま、体をひねり器用に太い木の枝に飛び乗った。

「松明を持っていれば、あのつるはもう襲ってこないらしいな」

森の化け物 7

木の上からケーデインの声が返ってくる。

木の上の灯りはゆらゆらと森の奥へと進んでいく。

「待ってください」

クロフは木の上のケーデインを呼び止め、もう一つの人影を指さす。

「彼をまだ助けていません。よかつたら、手を貸してください」
すると木の上から大きなため息が返ってきた。

「あんたがお人好しなのは想像が付いていたが、おれはそんなにお人好しじゃないんでね。森の入り口であいつを見つけたとき、おれはわざと助けないでおいた。それが何でかわかるか？ おれは故郷を出てもう八年経つが、傭兵という仕事柄ああいう人間はごまんと見てきた。ああいう奴は周りの人間の足を引っ張るだけで、何の役にも立たない口先だけの男だ。あんたもツキに見放されなくなかつたら、さつさと見捨てることだな」

クロフは暗闇から響くケーデインの言葉にじつと耳を傾けていた。
「それでも、ぼくは彼を助けなければ。このまま見捨てていくことは出来ません」

クロフの真つ直ぐな瞳に、闇の中から諦めたような声が返ってきた。

「わかったよ。手伝ってやる。ただしこいつが足手まといだとわかつたら、おれは迷うことなくこいつを泥沼に放り込むからな」

ケーデインは松明を持って、森の奥から戻ってきた。

「おれはこいつを支えるから、あんたは下から松明の炎でつるをほどいてくれ」

クロフはうなずき、つるに絡まったヒーネに近づいた。

下から松明を掲げると、木のつるはするすると解けていく。

ケーデインが木の上から片腕でヒーネの体を引っ張り上げる。

クロフはすぐに木の枝によじ登り、太い枝を選んで歩いていった。木の枝の上は所々緑のこけで覆われ、すべりやすくなっていた。

「彼は大丈夫ですか？」

クロフが近づくと、ケーディンは木の枝に横たわっているヒーネをあごで示す。

「気を失っているだけだ。良かったな。騒いで泥沼に捨てずに済んだな」

ケーディンは闇に彩られた森の奥を見つめ、そちらに松明を向ける。

「このままここにいて、いつ松明が尽きて、木のつるに巻かれるかわたったもんじゃない。先に進むぞ」

黙って遠ざかっていくケーディンの後ろ姿を見送り、クロフは気を失っているヒーネを肩に背負う。

ケーディンはクロフをちらと振り返っただけで、それ以上何も言わなかった。

かわりにクロフに歩幅を合わせ、松明で足下を照らしてくれた。太い枝の上を選んで歩き、進むにつれて細い枝が絡み合っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7556x/>

赤と青の神話 一章

2011年10月27日08時03分発行